

1.

一九六七年十二月二十九日

世界平和アピール七人委員会

原子爆弾の出現以来、四半世紀に近い歳月が経過したが、その間に核兵器保有国は五つになり、その中でも特に米ソ両国の核兵器体系は多様化と巨大化の一途をたどってきた。最近「核の傘」におおわれた世界」という表現がしばしば使われるようになったが、そこには、今後の人類は核の傘の下で暮さねばならぬという宿命論的なあきらめさえ感じられる。そう思いこむ

のは人類の平和への努力の意義と有効性を否  
定するものである。核の傘という言葉自体が  
おかしい。傘は雨を防ぐためのものであるが、  
核の傘といわれればそれは全く反対に  
人類の頭の上に火の雨を降らす源となるもの  
である。それどころか核の傘自身かほとんど  
巨大化しつつある怪物で、このまま成長してゆ  
けば結局人類を呑みつくしてしまうであろう。  
しかし、それは自然現象ではない。人間がそれ  
をつくり出し、それを成長させてきたのである。

従って、それは人間の力によつて、消滅させるこ  
とができるはずのものである。  
あるいはまた「核アレルギー」という言葉も最  
近よく使われるが、元来アレルギーとは特に危  
険でもない物質に対して、異常に敏感な特異体  
質に係していわれることである。ところが  
核兵器は危険きわまりないものである。これ  
を危険だと思ふのが正常な人間であつて、危険  
に対して不感症になつてしまふ方が異常なの  
である。

日本人もふくめて世界的に核の傘に封する  
宿命論者、核兵器不感症患者が増加してゆくな  
らば、人類の前途は暗黒である。現在までの日  
本人の大多数は原爆の経験と平和憲法をより  
どころとして、人類の存続と世界の平和のため  
に貢献しようとしてきた。私たち日本人は核  
兵器を廃絶してしまわぬ限り、各国民の安全と  
繁栄は訪ねないという自明の真理を再確認  
し、日本が世界を核時代の次に来たるべきより  
よき時代へ導くリーダーとしてその役割を果た  
すために、今後も一層努力したいと思  
~~い~~ <sup>っている</sup>。